

---

# 世界の公文書館を巡る動向と日本の課題

菊池 光興  
国立公文書館

---

## 1. はじめに

過去数年の間、職場の同僚や国内関係者そして国際公文書館会議（International Council on Archives:ICA）に集う各国と事務局の関係者の温かい支援と協力の下で、私は、ICA の副会長、同時に ICA の円卓会議（CITRA）の議長、さらに東アジア地域支部（EASTICA）の議長に選出されるという身に余る栄誉に与った。そして、これらの重要な職責を果たしていく過程で、個人的にも多くの得難い経験を積み、他では得られない知見を得ることができた。ICA には、ほぼ国際連合に匹敵する 190 もの国・地域からメンバーが参加しているが、これ等の多様な、そして時には協調的、時には対立的な要素も内包する歴史的、文化的、民族的、社会的、経済的な背景を異にする世界中のアーカイブズ関係者と交流を重ね、情報を交換し、互いに悩みや喜びや誇りを語り合う内に、次第に個人的な尊敬や友情や信頼の関係を築くことができたことは大きな喜びであった。現在では ICA や EASTICA の役職の任期は無事に満了することができたが、今年になって改めて ICA に設けられている国際アーカイバル開発基金（Fund for International Archival Development）の信託理事に任命されたので、いま暫くは、国

---

菊池 光興（きくち みつおき）  
独立行政法人国立公文書館特別相談役

際的な公文書活動との関わりを保つことになると考えている。このような活動を通じて、日本の公文書館の一員として、また、これまでに培った ICA に多くの友人を持つ個人として、世界と日本のアーカイブズの架け橋、連絡役的な役割を果たすことができれば、これまで大変お世話になった方々への感謝の印にもなるであろうし、また、日本の関係者が国際化へ進む上での道標の役割を果たすことになるのではないかと勝手に思い込んでいる。そこで、本稿では、その初めとして、最近の世界の公文書館を巡る情勢のいくつかを取り上げ、これ等を我が国の現状に照らして、その持つ意味を考えてみることにしたい。

## 2. 公文書館予算の圧縮と各国の対応

21 世紀に入り、特にここ 2、3 年の世界的な経済の不調や急激な変動が各国政府の財政状況の悪化をもたらす中で、各国の公文書館に割り当てられる予算は、軒並み削減を余儀なくされているようである。政府、特に議会からは予算支出に見合う目に見える成果を挙げるように強いプレッシャーが掛けられつつある反面、公文書館利用者やマスメディアからは公文書の的確な保存やより容易な利用方法の確保に関する要求が高まっている。このような状況の中で、各館とも、日本の国立公文書館と同じく、効率的な運営、顧客満足の向上、提供サービスの質の改善等に必死で取

り組んでいる。予算削減の影響は、各国からのICAの分担金の拠出にも及びつつあり、今後各国に割り当てられる年会費の額やICAの支出予算の内容などを巡って、厳しい議論が予想される。ただ幸いなことに、ICA財政の監査体制に関しては、私の副会長在任中に当館の監事の貴重なアドバイスを受けて、ICA監査委員会の設置、外部の監査法人による公的監査報告の採用、財務諸表の充実などに努めた結果、現在では、ICAの財政は、大変透明性の高いものとなっており、この点での無用な議論は避けられると考えている。

ところで、ICAの財政は、会員たる各国の公文書館などの年会費だけで運営されているのではない。ICA事務局や各地域支部・専門分野セクションで働く多くのボランティアの献身や、これ等の人々を派遣し実質給与の支払いをしてくれている各国政府の肩代わり負担、さらにはICAの大会やCITRA、理事会、管理運営委員会などの開催ホスト国による多くの人的、物的負担などによって、この組織の運営が支えられていることを忘れてはならない。

我が国は、国立公文書館としての年会費ベースでは、米国に次ぐ拠出国になっているが、会員国としての参加アーキビストを通ずる人的貢献や寄付などの現物支援は少ないのが実情であり、まだまだ残念な状況にある。できるだけ多くの日本関係者の国際的公文書活動への参加貢献を期待する所以である。なぜなら日本からの参加そのものが、ICAの活動の中にアジア、極東からの息吹を吹き込み、多様性をもたらす貴重な貢献そのものとなると期待されるからである。

### 3. 公文書館のデジタル化の推進とサービス提供の重点

厳しい予算の制約の中で、提供サービスの向上・拡大を図ることが求められている各

国の公文書館は、いずれも従来からの利用者サービスの在り方の再検討を始めている。各館の現場に足を運び、現物の公文書を請求し、これを閲覧する在来型の利用者をOn-site userと呼ぶとすれば、インターネットにより公文書館のウェブサイトからデジタル化された公文書を検索し、これによって内容を閲覧する利用者はOn-line userと名付けられる。これからの公文書館のサービスとしてOn-site、On-lineのどちらを重視すべきかの議論が、広く交わされている。もちろんこの議論は主に先進国の公文書館関係者間においてなされているが、近年におけるデジタル化の波は思いもかけない発展途上地域の国々の公文書館にも及んでおり、またこれらの国も新興国の威信をかけて出来るだけ早期にデジタル化に取り組みたいとの強い希望を有していることから、ある意味ではこの議論は、全世界での議論といっても過言ではない程である。

この議論にはいまだ結論が出ていないが、利用者一人ひとり当たりにかかるコストからすれば、圧倒的にOn-line userの方が安上がりであることから、予算の縮減の中で目に見える形での成果を挙げるために、今後はさらに一層デジタル化の促進を促進する方向に向かうべきであり、限られた財政資源や人的資源の投入も、この優先度を反映しながら決定されるべきであるという見解が大勢を占めつつあると認められる。

しかしここで忘れてならないことは、On-line サービスを今後の提供サービスの主流とするにしても、そこで提供するデジタル化された公文書には、単なる画像だけでなくOn-siteで提供するレファレンスと同等の情報を併せて提供する必要があり、この面での公文書館のアーキビストの任務と責任は、On-site サービスの場合と比べ増えることはあっても、決して減ることはないという事実である。On-line サービスの質を規定する

のは従来型の On-site サービスの在り様であり、公文書館のフロントエンドが変わろうとも、バックヤードでは常に地道な所蔵資料の調査研究を継続しなければならないという当然のことを、改めて確認しておきたい。

#### 4. 公文書専門職の役割と職能の強化

世界各国において痛感するのは、公文書専門職、その名称は地域や国によってアーキビスト、レコードマネージャー等異なることはあっても、これ等の人々が等しく自負と使命感を持って、自分たちの生きる現代社会の記録を将来に残し、先祖から受け継いだ歴史的遺産を正しく利用し更にこれを次の世代へと確実に伝えていくという高い使命感を有しているということである。そこには、中央政府の記録であるからとか、小さな地方の記録であるからとか、又は民間の非公式な組織の記録だからということには区別無く、あるいは、彼らの所属機関が公的なものか、民間の私的なものかを問わず、その状況の中で果たすべき役割を自ら主体的に選択し、実践するという強固な意志の力を感じ取ることができるのである。

このような中で、公文書専門職の多くの人々は、従前に取得した資格やディプロマにのみ頼るのではなく、常に専門職集団の提供するセミナーや講習会に参加し、その職能の向上練磨に努めているという事実も見られる。ICA のセクションなども、この点での大きな機能を果たしているということが分かってきた。この意味からも、日本からできるだけ多くの志のある人々が、ICA を初めとする国際的な公文書活動に参加して、このような機会を活用し、日本のアーカイブズの発展・充実に貢献していただきたいと念願するものであり。

また、このようなアーキビストの職能 (competency) を高め、強化する方法として、

インターネットを使った遠隔教習や通信教育が多用され、関係者の努力もあって、従来日本で考えていた以上の成果を挙げていることなども感じ取られた。この点は、諸外国の例を参考にして、我が国でも今一度、方法論や教育内容などを検討し直して見る価値があるのかも知れないと考えているところである。

#### 5. 日本から世界の公文書活動を見る視点

世界の公文書専門職の多くは、強い使命感と自らの役割への熱い情熱を抱いていることを述べたが、彼らは決して恵まれた状況の中で、自由に活動できている訳ではない。それとは逆に、時には銃弾が飛び交う烈しい政争の中で、日常の生活資材にも事欠くような窮乏の中で、外部からの支援も無い孤立した状況の中で、また激越な災害の中で、必死に歴史遺産としての文書記録を守り、明日の利用のために保存修理に文字通り命を懸けて取り組んでいる人が少なくない。記録の保存に関心も利益も有しない政府や組織のトップを説得して、公文書館の機能を細々とでも維持していくことは、法律があるからとか、アーキビストの資格制度が確立しているからという前提条件と深い関係がある訳ではなく、もっぱらその任にある関係者の情熱と根気に負っ



ている面が多い。しかも、その当事者は、そのような状況を楽しんで、誇りに思っただけで、さえないことも少なくないのである。

実際「公文書館を建てるより社会秩序を立て直すことの方が先だろう」と考えたくなるようなアフリカの国から参加しているアーキビストに何回も何人にも会ったが、そのような国にも公文書館が存在しているのだ、アーキビストが与えられた条件の中で努力しているというのだという強烈なメッセージが伝わってきた。逆に前回会ったアーキビストが次の会合に欠席すると、どうしたのか、何があったのかと、こちらが心配するほどの存在感を発揮するのである。

これとは逆に、西欧先進諸国などからの参加者は、文学、音楽、絵画、彫刻など非常に幅広い文化的な教養に富み、アーカイブズに関する論文や講演の中はもとより日常の会話や食事の最中にも、それらの片鱗がしばしば顔を現すことが多い。日本からの参加者として、話題の中身が掴めず当惑した経験も度々であった。普段からできるだけ関心と興味の対象を広く取り、分からないところは率直に尋ねることができるようになるには、相当の時間を要した記憶がある。

このような体験を重ねた結果得ることのできた確信は、我々も日本の現状を嘆いているばかりでは駄目ではないか、胸の奥に希望を持ちながらも現状を噛み締め、明日に向かって一歩ずつ進んでいく雄雄しさを持つべきで

はないかということである。今のまま国内だけに止まっていると、いずれ日本の公文書館やアーキビストは、日本列島の中だけに通ずる判断基準と実践技術を独自に発展させて行き、世界の標準とは大きく異なる「ガラパゴス的進化」を遂げてしまうのではないかと懼れるところである。

そうならないためにも、現在の厳しい状況の中にあっても、できるだけ多くの日本人々に世界の公文書の世界に乗り出していただき、世界のアーカイブズの素晴らしさと面白さを味わってもらい、同時に日本のアーカイブズの実力と長所を確認してもらいたいものだと思っている。ICA も、EASTICA も各国からの個人会員や国内のアーカイブズ関係団体等にできるだけ広く門戸を開き参加を求めているところであり、個人会員の年会費、特に学生の年会費は低廉な額に抑えられていることから、日本の物価水準からすれば比較的容易に負担可能な水準になっている。個人会員あるいは団体会員になることにより、専門分野の研究機関誌などの配布のほか、ICA の会員専用の website にアクセスして、自由に必要な情報を手にすることができるなどの特典を得ることもできるようになり、会員自体の活動に裨益するのみならず、広く我が国の公文書館活動全体への新しい情報導入の刺激になることも期待される。

ぜひ多くの方々や団体に、ICA や EASTICA の会員としての参加をお願いしたい。